

日中両言語の諺における表現形式の対照比較考察 ——「酒」と「茶」の諺をめぐって

王 雪

はじめに

諺は熟語、故事、格言と同じように、各民族言語の重要な部分である。諺には凝縮された、通俗的で、生き生きとした言葉が用いられている。そして、韻律調和などが取れており、奥深い道理に富んでいる特徴を持っている所は民族民間文学の奇跡である。人間の言語表現は、言語を効果的に使用することによって、意思を伝達することをよりよく達成しようとする。そこに表現のため生み出される各種の技巧は、諺の言語表現の一種として位置づけることができる。諺の知識や哲理は民衆の多年の経験であり、民衆の間に言い習わされてきたものであり、それゆえ生活的な重みを有している。

1. 考察目的と意義

日中両言語の諺の表現形式の特徴をめぐって、対照比較研究を行うことによって、両言語の諺における表現の異同を認識することができる。関本（1983：26）「諺は、簡潔で、しかも含蓄のある表現の中に、庶民の生活の知恵を盛り込んだものであり、そこでは少ない単語で大きい効果をあげるために修辞法上のさまざまな技法が用いられている」と述べている。両言語の諺における形式の特徴を対照比較考察することによって、我々がそれぞれ両言語の表現の豊かさに注目するだけでなく、諺の意味解明や、諺の内層的な意味への理解をさらに深めることができる。

2. 考察対象と方法

本稿で扱う考察対象は、日本語と中国語の「酒」と「茶」に関する諺である。

まず、日本語の諺の用例は『故事・俗信ことわざ大辞典』（尚学図書編集、1981）を資料に、諺を取り出す。『故事・俗信大辞典』はいろいろな由来をもつ諺や俗説など、約四万三千項目をおさめている。そして、さまざまな成り立ちの表現が、文献・資料として記録され、専門事典としてこれまでにみられない規模のものとなっている。

一方、中国語の諺は、温端政などが編集した『中国谚语大全』（2004）を中心に、諺の用例を取り出してみた。この辞典は、中国の『国家社会科学の基金項目』の「言語俗語の語彙材料のコンピュータ処理とそれに関わる言語学問題の研究」の最新成果として、これまでにない規模で行われた研究プログラムの一環である。『中国谚语大全』は約十万項目の諺を集録している。中国の現代諺辞書において、諺の数で最も規模の大きい諺辞典であ

る。

それから、「酒」と「茶」は日中両国の国民にとって、最も身近に感じ、日常生活の中でよく飲まれるものである。これらの諺を例にし、普段人々が考えている生活の知恵や教訓も窺える。また、様々な諺の内容があるように、表現形式も多種多様である。考察方法として、先行研究の理論を踏まえ、それぞれ両言語の諺表現を分析しながら、実際に諺に現れる表現の特徴を見ていく。最初に、諺の形式から例を挙げながら、分析を試みる。次に、諺の修辭的特徴について、最後に、用語の選択というような形で、諺の表現の異同を比較してみる。次に具体的に見てみよう。

3. 単文形式と対句形式の諺

温（1991：155）は「諺の構造を分類すると、単文型と複文型の二種に分けられる。単文型は一般の単文と同様に非主述文と主述文がある。複文型はその結びつきかたによって、一つは単文が直接結合し、語順でその構造が分かるもの、もう一つは間に入る接続詞で結ばれるものである」と考えている。また、武田（1992：122-124）は「諺は定形句であるが、定型を持たない。諺には、一組の主題と叙述からなるものもあれば、二組の主題と叙述からなるものもある。ここでは、前者の形式を『短句』と呼び、後者に属する諺を『対句』と呼ぶ」というように諺の形式構造を指摘している。

この節では、諺の形式構造について考える。特に温（1991）、武田（1992）などの研究を踏まえ、諺の構造をめぐり、具体例を挙げながら見ていく。さらに、どのような構造であるかについても検討する。温が指摘した「単文型」を「単文形式」と呼び、「複文型」の中にある「対句形式」を中心に分析を試みる。

3.1 単文形式

まず、諺は聞き手を魅了するような表現形式でなければならない。その表現形式の重要な要素となるのは、簡潔さである。諺には簡潔さを保つために、常に省略法が用いられている。いわゆる、章句を簡潔にして、言外の陰影・余韻・暗示を読者に読み取らせる修辭法である。諺はまさに民衆の長い経験から凝縮した短い文章である。これについて、坂東（1971：6）は次のように述べている。「しかしながら、本来簡潔な表現というのは、その表現形式が短いという量的な面だけをいうのではなく、短い言葉の中にどれだけ多くの意味内容が含有されているかという質的なものをいうのである。」……「換言すれば、表現形式が長ければその意味内容は具体化し、意味を限定するし、短くなると意味内容は抽象化し、意味を拡大する傾向があるということである。」

(1) 非主述文

名詞の組み合わせによる非主述文である。

(日) 「根深雜炊生姜酒」 「酒飯雪隠」 「下戸の粕汁」
「妹背の杯」 「順の杯」 「名残の杯」 「最後の杯」

- (中)「茶头酒尾飯中間」(茶頭酒尾飯中間)
「时新茶叶陈年酒」(旬の新茶長年の酒)
「冷茶餓酒断腸丸」(冷茶餓酒腸を断じる薬)
「早茶晩酒」(朝茶晩酌)

(2) 主述文

a. 動詞文：述部が動詞文である。

- (中)「闷酒难饮」(やけ酒は飲みにくい)
「酒盖三分羞」(酒は三分の恥ずかしさを隠す)
- (日)「甘酒箸に刺す」
「濁酒も茶よりは勝る」

b. 形容詞文、名詞文：述語文部分が形容詞文または名詞文である。

- (中)「酒是软口汤」(酒は口を軽くするスープ)
- (日)「手酌は恥のもの」(名詞文)
「身代と杯は大きいほど良い」(形容詞文)

c. 主述文：述語文部分が主述文である。

- (中)「醉汉心里明」(酔いどれは心の中は何でも分かる)

3.2 対句の種類

まず、短句形式の基本的なものを取り上げる。短句の諺の基本は、二つの文の形式である。二つの文の形式は単純であるから、それだけ印象が深くかつ覚えやすい。諺の真骨頂は、主題によって問題を持ち出しておき、その問題を叙述によって解いてみせる、その手口の妙にある。その解釈の意外さが、時には謎解きに似たおもしろさを生む。

諺では対句形式という形が用いられることが多いので、諺を組み立てる語句の中でも、対照的な意味と類似的な意味を成している語句が主な特徴として現われている。諺は中国では、文芸、文学として扱われている。古田(1983:261)は「中国文学は『なにを言うか』よりも、『いかに言うか』が、より重視される文学であるといわれる。言いかえれば、内容よりも表現が重視される文学である」と述べている。対句を構成することに関し、『レトリックと文体——東西の修辞法をたずねて』という本の序文では、次のように論じている。「中国語が単音節的な言語、すなわち一字一音一義であるため、字数のそろった対句となり、自動的にその長さも音節数もきちんとそろったものになるからである。また文字が象形を基本として作られているので、直観的視覚的な対照美を呈することになる。それに文字が一字ごとに平上去入の抑揚の調子を固有しており、対句を構成する二句相互間で平と仄が対応し、陰陽相牽くかの如くにしっかり結びつくことになるのである。」

そして、武田(1992:123)はまた「諺が偶数律、二句形式になりやすいのは、たえず、二つの概念を並べたり、比べたり、対立させたり、といった意識が働いているからである。それは、理論から見れば対象を相対化することであり、表現からみれば目標とするものの

特徴を際ただせることでもある。AはBと対比されることによって引き立つ。しかも、比較表現は、二句形式におさまりやすい」と諺の形式の特徴を述べている。次に、両言語の諺における形式の特徴に関して、例を挙げながら、見てみよう。

(1) 対偶

字数、語義、品詞、時には平仄¹まで合わせる。例えば、

- ①「酒里乾坤大，茶中日月长」（酒の中は乾坤が大きく、茶の中は月日が高い）
- ②「锦堂客至三杯酒，茅舍人来一盏茶」（豪邸からの客は三杯の酒を、あばら家からの人は茶一杯で招待する）

①では、「酒」と「茶」（名詞）、「里」と「中」（方位詞）、「乾坤」と「日月」（名詞）、「大」と「长」（形容詞）が語義と品詞で対応し、平仄も仄仄平平仄と平平仄仄平で対応している。

②では、「锦堂」と「茅舍」（名詞）、「客」と「人」（名詞）、「至」と「来」（動詞）、「三」と「一」（数詞）、「杯」と「盏」（量詞）、「酒」と「茶」（名詞）が語義と品詞で対応し、平仄も仄仄仄仄平平仄と平仄平平仄仄平で対応している。

(2) 対比

前後の文が同じ文法的構造をとり、また語義も対応している。前後の文が構造的に対応していることは対偶と同じであるが、前後で重複する語句が比較的多いという点で異なる。例えば、

「酒肉朋友短，患难夫妻长」

酒と肉で結ばれた友達関係は短く、難儀を共にした夫婦関係は長いことである。友達関係と夫婦関係を対比させている。「酒肉」と「患难」（名詞）、「朋友」と「夫妻」（名詞）、「短」と「长」（形容詞）で、それぞれ対比させるのである。

「浅杯茶，满杯酒」（浅い杯の茶、満杯の酒）

茶を注ぐとき、浅く注いだほうがいいが、酒を注ぐとき、一杯になったほうがいいと述べている。ここでは、「浅杯」と「满杯」（名詞）、「茶」と「酒」（名詞）で、対比させることによって、意味が明らかになる。

「酒坏君子色坏人，烟伤五脏气伤心」

酒は君子を損ね、女色は人間を損ね、煙草は五臓を傷つけ、怒りは心を傷つけるのであるという意味であるが、「酒」と「烟」（名詞）、「君子」と「五脏」（名詞）、「色」と「气」（名詞）、「坏」と「伤」（動詞）、「人」と「心」（名詞）という対応の仕方で行き渡らされている。

「乐极生悲，酒极作乱」

楽の極まりは悲しいことを起こし、酒の極まりは乱が発生するということを述べている

¹ 平仄はつまりアクセントのことである。中国語共通語の四声のうち、一声、二声が「平」、三声、四声が「仄」である。

が、「乐」と「酒」(名詞)、「生」と「作」(動詞)、「悲」と「乱」(名詞)で対応している。

「酒飲席面、话讲当面」

「席面」は宴席である。「当面」は向かい合うことである。意味的には、宴席を開く時は皆在席しているので、酒も宴席の時に飲むということである。他の人に何か文句があったら、ごそごそ蔭で言わずに、会って話すべきである。「酒」と「话」(名詞)、「飲」と「講」(動詞)、「席面」と「当面」(名詞)はお互いに対応する関係になる。

一方、日本語の諺では、対比関係になるのは次のようである。

「飢えて死ぬは一人、飲んで死ぬは千人」

食べ物がなくて死ぬ人より、酒を飲みすぎて死ぬ人のほうが千倍も多い。「飢えて」と「飲んで」(動詞)、「一人」と「千人」(名詞)で対応している。

「言えば言い得、飲めば飲み得」

言いたいのを我慢するより、言ったほうが得である。また、酒も飲むとなればどんどん飲んだほうが得ということである。「言えば」と「飲めば」(動詞の仮定形)、「言い得」と「飲み得」(名詞)で対応している。

「鏡は容貌を見せ、酒は心を現す」

鏡が姿形を映すように、酒を飲むと、ふだん心の中に隠し持っている本心が現れる。「鏡は」と「酒は」(名詞・係助詞)、「容貌を」と「心を」(名詞・格助詞)、「見せ」と「現す」で対応している。

「陥り易きは酒の海、迷い易きは色の道」

酒と女色の道には身を誤りやすいことをいっている。「陥り易きは」と「迷い易きは」(複合形容詞・格助詞)、「酒の海」と「色の道」で対応している。

「酒は古酒、女は年増」

酒は新酒よりも古酒のほうが味に深みがあってよく、女は若い世間知らずの女よりも年増のほうが情愛が濃くてよい。「酒は」と「女は」(名詞・格助詞)、「古酒」と「年増」(名詞)で対応している。

(3) 同義対応

対応する二つの句が同じかきわめて近いことを言っている。例えば、「吃酒的望醉，放债的图利」(酒を飲む人は酔いを望み、金貸しをする人は利益を図る)

人間は物事をするとき、自分の目的を持っているという寓意が隠される。

「酒色伤人，酒色误事」(酒と女色は人を傷つけ、酒と女色は物事をしくじる)

酒と女色は人と物事を滞らせるものであるということを語る。

「好酒食一滴，好花插一枝」(好酒なら、一滴だけ飲む。美しい花なら一輪だけ差す)

物事をするには、量を少なくしていたほうがいと述べている。

「好酒饮到微醉时，好花看到半开时」(おいしい酒は微酔まで飲み、美しい花は半開きの時まで見る。)

物事をするとき、適当にしたほうがいと述べる。

「喝酒喝味，听话听音」（酒を飲み、味を飲む、話を聞き、本音を聞く）

物事の外見より、その中身を味わったほうがよいと述べる。

「着物は長持ちから、茶はカンスから」

物を求めるには、その物がある所に行かなければいけない。物によってその求める方法は、道が違うことをいう。

「鬼も十八、番茶も出花」

どんな醜い女でも、年頃になれば、それ相応に美しくなり、世の情けをも解するようになるという。

「酒は酒屋に、茶は茶屋に」

酒のことは酒屋に、茶のことは茶屋に任せるのがよい。物事にはそれぞれ専門があるという。

このように、同じ意味の文を二つ対比させることによって、表現内容を強調し、その意味をより明確にさせることもできるといえる。

(4) 反義対応

上の同義対応とは逆に、二つの句の意味が反対である。武田（1992：125）は「対義結語の諺が教えるのは物事には両面があり、真理と誤謬は背中合わせであって、いつでも相互に転換する可能性がある」と述べ、「対義」と「反義」は異なる言葉で同じ概念を表わしている。即ち、形式が同じで意味の対立する二つの名詞句を付き合わせる表現である。これは、二項対立の論理を好む諺が多用するタイプである。例えば、

「喝酒成友，玩钱成仇」（酒を飲み、友になり、金をやりとりしたら、敵になる）

酒を飲むことと金で遊ぶことはまったく別々の結果をもたらす。人間同士は酒を飲むことによって、友達になるが、しかし、人間同士はお金で遊ぶことによって、敵になるのである。

「酒满敬人，茶满伤人」（酒満杯人を敬い、茶満杯人を損ねる）

満杯の酒は人に敬意を表わすが、しかし、満杯の茶は人のメンツを潰す。

「茶喝多了养身，酒喝多了伤身」（茶をたくさん飲めば、身を養い、酒をたくさん飲めば、身を傷つける）。

茶を多く飲んだら、体を養うが、しかし、酒を多く飲んだら、体を損ねることしかない。

「男の子は餅で育て，女の子は酒で育て」

男の子は用いて育て、女の子は下げて育てた方がよい。

「上戸は毒を知らず，下戸は薬を知らず」

酒飲みは酒が体に悪いことを知らずに飲み、酒の飲めない人は適量の酒が体によいことを知らないで飲まずにいる。酒が毒にも薬にもなるという、両面をもつことをいう。

「酒は先に友となり，後に敵となる」

酒は友達を作るきっかけとなるが、後ではその友達といさかいを起こす原因にもなるということである。

(5) しりとり

前の分の最後の語句が、後の文の最初の語句となって続いていくものである。例えば、「卖酒不陪客，陪客赚不着」（酒を売る<人>は客と伴わず、客と伴う<人>は儲からない）
「买酒的不喝酒，喝酒的不买酒」（酒を売る<人>は酒を飲まず、酒を飲む<人>は酒を買わない）

「酒は肴、肴は気取り」

酒のうまさは肴の良し悪しで決まり、その肴は趣向や飲む場所などの雰囲気や良し悪しが決まるということである。

このように、後句のはじめが前句の終わりと同じものであることによって、前後のつながりがいっそう強くなり、語気を強め、リズム感も作り出している。以上で、諺における形式の対句性と内容の対応について、分析を試みた。一見形式がバラバラになりそうな諺も一定の形式規則に従い、創作されていることが分かった。ただ、全ての諺は一斉にある一定の形式に当てはまるわけではないが、規則のある諺の対句における特徴を窺うことができた。

(6) 破格

諺の持つバランスと正反対の側面一対称性のバランスをくずすことで、単調さを避けるという破格表現もまた諺の持つ一つの特徴である。例えば、

〔中〕「成不成，媒人烧酒两三瓶」（〔結婚に〕なるかどうか、仲人に送る二、三瓶の焼酎次第）では、前句「成不成」は三文字であるが、後句「媒人烧酒两三瓶」は七文字であるため、単句形式でも、対句形式でもない。

「立夏茶，夜夜老，小満后茶变草」（立夏の茶、毎晩古くなり、小満の後、茶は草になる）

〔日〕「酒の酌九分に酌げよ、夜八分船七馬六子供五分五分」では、前句と後句の字数が異なっていることから、破格表現であると見なされている。

以上挙げられた諺はいずれも前句と後句の字数が異なっている。また、三つの句から構成される諺もある。これも、明らかに字数も構造も異なっている。

4. 諺の修辞的特徴

4.1 中国語の諺の韻律

諺は韻律上の美しさを作り出すために、リズムと押韻が非常に重視される。その結果、口でしゃべっても耳で聞いても独特の響きがあって、伝わりやすく、また覚えやすい。諺のリズムは大体詩のリズムと同じである。句の中にある字数によって、異なるリズムで諺を読む。酒と茶に関する諺を例にし、それぞれのリズムはどうなっているかを見てみよう。

(1) 四字句のリズム

四字句のリズムは「二・二」で切れる。例えば、
「冷酒／傷命」（冷酒は命を損ねる）
「酒后／无德」（酒酔いになったら、道徳も失われる）
「浓茶／解酒」（濃い茶は酒の味を解く）
「早茶／晩酒」（朝茶晩酌）

(2) 五字句のリズム

五字句のリズムは「二・一・二」、「二・三」、「二・二・一」で切れる。例えば、
「酒令／如／君令」（酒令は皇帝の命令の如し）
「醉汉／心里明」（酔いどれは心の中は何でも分かる）
「酒盖／三分羞」（酒は三分の恥ずかしさを隠す）
「客到／茶烟／起」（客が着くと、茶、煙草を出す）

(3) 六字句のリズム

六字句のリズムは「二・二・二」で切れる。
「吃酒／不怕／面红」（酒を飲むからには、顔が赤くなることを気にするな）
「醉汉／不说／误事」（酔いどれは言わずに、物事をしくじる）
「酒令／严于／军令」（酒令は軍令より厳しい）
「酒令／不分／亲疏」（酒令は親疎を問わない）

(4) 七字句のリズム

七字句のリズムは「二・二・三」で切れるものが多い。諺によって、「二・二・一・二」で切れるものもある。

「茶七／飯八／酒加倍」（茶七飯八酒増倍）
「从来／佳茶／如佳人」（従来佳茶は佳人の如し）
「冷茶／饿酒／断肠丸」（冷茶餓酒腸を断じる薬）
「时新／茶叶／陈年酒」（旬の新茶長年の酒）
「高山／雾多／出名茶」（高山霧多く銘茶が出る）
「酒好／不怕／巷子深」（酒が良かったら、巷（酒屋の所在地）が深くても良い）
「酒席／好摆／客／难请」（酒席を行うことは簡単だが、客を招くことは難しい）

(5) 押韻の諺

前述の(1)～(4)は全て単句形式の文であるが、対句形式の諺は、リズムのほかに、押韻することも一つの顕著な特徴である。諺の前句の語尾と後句の語尾における文字の「拼音」（中国語の表音表記）は韻母がまったく同じである。それを押韻という。例えば、
「滚酒伤身（shen），恶语伤人（ren）」（煮え酒は人の体を傷つけ、悪口は人の心を傷つける）
「酒肉穿肠过（guo），佛爷当中坐（zuo）」（酒と肉は腸の中を通り、お仏様は真ん中に座る）
「酒杯一端（duan），政策放宽（kuan）；筷子一提（ti），可以可以（yi）」

(杯を持ったら、政策を緩やかにする。箸を持ったら、いい、いい)

「喝酒不醉最为高 (gao), 贪色不迷是英豪 (hao)」

(酒を飲むが、酔わないのは最高で、女色に耽るが、惑わさないのは英雄)

「酒逢知己 (ji), 话得投机 (ji)」(酒を飲み、知己に逢い、気が合う)

「好茶是个宝 (bao), 坏茶一堆草 (cao)」(よい茶は宝、悪い茶は一塊の草)

「客从远方来 (lai), 多以茶相待 (dai)」(遠方より客は、多く茶で招待する)

「茶没叶子不如水 (shui), 人没钱了不如鬼 (gui)」

(茶は葉がないと、水にもかなわない、人は金がないと、鬼にもかなわない。)

4.2 日本語の諺の韻律

(1) 七・五・七の韻律

日本語の諺はまた中国語の諺と異なり、その独自の韻律を持っているのである。俳句のような「五・七・五」という韻律にしたがった諺もある。例えば、

「酒なくて／何の己れが／桜かな」

「さけなくて／なんのおのれが／さくらかな」

「世の中は酒と女が敵なり」

「よのなかは／さけとおんなが／かたきなり」

とはいえ、諺はやはり諺であって、歌謡ではないので、「七・五・七」のような韻律を持つ諺は「酒」と「茶」に関する諺をながめると、数が少ないのは事実である。

(2) 語呂合わせ

また、もう一つの特徴として、語呂合わせという。

例えば、「情けの酒より酒屋の酒」

情けをかけてくれるより、酒の一杯でも飲ませてくれたほうがよい。上辺だけの同情より実利を重んじる喩えである。「なさけ」に「さけ」にかけて語呂合わせでいう。

「これから酒の壇の浦」

《源氏と平氏の最後の戦いで有名な「壇の浦」に「段」をかけて》さあこれからは酒の段だというしゃれ言葉である。

5. 比喩

また、諺に現れる直喩、換喩、提喩及び誇張、擬人などの修辞法によって、生き生きと諺の内容が表現されている。武田 (1992: 138) は別の言い方で「比喩性という観点からことわざを分類すると、全体が字義通り、部分的に比喩、全体が比喩」と分けている。本小節では、武田の呼び方で「酒」と「茶」に関する諺を分析することを試みる。まず、「酒」に関する諺に現れる比喩を見てみよう。

(1) 酒飲みを表わす比喩

(日)「酒飲んで死んだ者は泥鰌ばかり」(部分的に比喩)

「上戸の額と盆の前」(全体が比喩)

(中)「酒酔如烂泥, 酒醒悔不及」(酒に酔った時、ぐちゃぐちゃの泥のようで、酒から醒めると、後悔しても間に合わない)(部分的に比喩)

酒飲み、即ち、酒を飲む人を表わす素材として、日本語の諺では、「泥鰌」、「盆の前」を用いているが、中国語の諺では、「烂泥」を用いている。各素材が表わす意味合いの特徴を次のようである。

いくら酒を飲んでも、死にはしない酒飲みは自分のことを生命力の強い「泥鰌」に見立てている隠喩が諺で使われている。泥鰌は田んぼの中で生息する動物(魚)である。日本民族が農耕民族であるという特徴から、生きのいい泥鰌を酒に浸すとすぐにぐったりしてしまう姿に基づき、生まれた酒飲みの発想である。また、酒量が大きい上戸は酒を飲むと、体が熱くなると同時に、額も熱くなるのである。額の熱さを日本に特有の祭り——お盆が行われる前の時期の暑さに喩えている。酒飲みの額は熱いことと、「盆の前」は気温が高く、気候が暑いことという両者の状態の類似性に着目し、前者を後者に喩える表現で、いうまでもなく隠喩である。

一方、中国語の諺では、「如」(ようだ)を使うことによって、直喩という比喩法が決まった。酔態になる人を「烂泥」に、ぐちゃぐちゃの泥は粘りが強く、手にとっても、まとまることができず、散乱しているような感じから、ぐちゃぐちゃ酒酔いの人を助けようと思っても、体がぐったりしているので、助けようもないという酔っ払った人の姿を連想させるのである。日本語の諺では、生きのいい「泥鰌」をプラスの意味としてとらえ、中国語の諺では、「烂泥」をマイナスの意味としてとらえることにより、諺を創作する人の立場が異なることが窺える。

(2) 酒席事情を表わす比喩

酒席事情を表わす諺は、大体部分的に比喩を示す諺である。

(日)「酒の席には**狢、猫、婆**」

「**雀**の酒盛り」

「杯に**ボウフラ**が湧く」

「杯は**畳の模様**でない」

酒席事情というのは、ここでは、酒席での雰囲気、酒席でお互いに酒をすすめたり勧められたりすることなどを指すことにする。酒席事情を表わす比喩素材として、「狢、猫、婆」、「雀」、「ボウフラ」、「畳の模様」などが用いられている。

狢猫婆は、自分に都合良い者には追従を言い、そうでない者には無愛想にする者で、そういう者を罵って言う言葉である。酒席で興ざめなものは「狢、猫、婆」であると思われ、「雀」は、群れでよく騒ぐという認識に基づき、賑やかでうるさい酒席に喩えている。一見「杯」に対する比喩であるように見えるが、実は杯の中についだ酒をいつまでも飲まない人に対する婉曲的な比喩で、時に酒をすすめる言葉である。相手が口をつけないままの

杯がずっと置かれた状態、即ち、杯にある酒が全然減らさない状態は流れない川のようにあるという発想から、「ボウフラ」という比喩素材を用いている。また、杯を下に置いたまま飲もうとしない人に酒を勧めていうもう一つの言い方がある。杯は置いたままになると、杯の底に「暈の模様」も移されるという誇張した言い方をしている。

(3) 酒を表わす比喩

酒を表わす比喩は部分的に比喩を示すものが多い。

(日)「酒は百薬の長」

「酒三杯は身の薬」

「酒は情けの露雫」

「酒は百毒の長」

「酒は気違い水」

「酒は諸悪の基」

「酒は諸道の邪魔」

「酒と朝寝は貧乏の近道」

「酒は先に友となり、後に敵となる」

「上戸は毒を知らず下戸は薬を知らず」

「酒と産には懲りた者が無い」

「酒と女と博打には鏡おろせ」

「世の中は酒と女が敵なり」

「陥り易きは酒の海、迷い易きは色の道」

(中)「酒色毒如刀」(酒と女は刀のように毒がある)

「財乃身之胆，酒者色之媒」(財貨は身の胆、酒は色の媒介)

「酒腸寛似海，色胆大如天」(酒の腸は海のように広く、色の胆は天のように大きい)

「酒是冬天的火，冷酒热发达」(酒は冬の火、冷酒も体を温める)

「酒是清的，醉酒的人是浑的」(酒は清く、酒に酔った人は頭が冴えていない)

「酒是烧身硝烟，气是无形火药」(酒は身を焼く火薬、気は無形の火薬)

「酒是歪吃，事是正应」(酒は軽々しく飲み、物事は真面目にやる)

「酒有别肠，诗有别才」(酒は別腸があり、詩は別の才ある)

「酒有烂面之功」(酒は顔をぼろぼろにする技がある)

「困困酒过，酒为困魔」(眠るのは酒のせいで、酒は眠りの魔である)

日中の諺における酒を表わす比喩素材の対比図

	酒の良さ	酒の悪さ
日本語の諺における 比喩素材	百薬の長/身の薬/情けの露雫/ 友/産/薬/海	百毒の長/気違い水/諸悪の基/ 諸道の邪魔/貧乏の近道/毒/敵/
中国語の諺における 比喩素材	冬天的火(冬の火)/別腸(別腸) /海(海)	刀(刃物)/色之媒(女色の媒介) /困魔(眠りの魔)

まず、日本語の諺における「酒」を表す比喩素材の諸相を見てみよう。酒の良さを「百薬の長」、「身の薬」、「情けの露雫」、「友」、「薬」などに喩えている。一方、酒の悪さを「百毒の長」、「気違い水」、「諸悪の基」、「諸道の邪魔」、「貧乏の近道」、「毒」、「敵」などに喩えている。酒の効用によって、酒を「百薬の長」、「百毒の長」に喩え、酒の薬効用と害を唱えている。無論、「百」は必ずしも百種類の薬と毒であるわけではないが、種類が多いことを表現するため、「百薬」と「百毒」が使われている。そして、酒は多くも飲まず、少なくとも飲まず、ただの三杯で、体にとってよい薬が「身の薬」になるのである。また、「露」は植物に潤いを与えるという印象をつけるが、「雫」は空を赤く染め、綺麗で人の心に穏やかな感じを与えるものであると思われる。ここで、暗喩が用いられ、酒が情愛をこまやかにする「露雫」に喩えている。酒を飲むと、人間の情愛も細やかになると称えている。また、対句表現で、最初に飲んだ酒は「友」であるが、酔いが深まることにつれ、飲んだ人の言葉遣いや振舞いも乱暴になる可能性があることから、「友」から「敵」に変わると酒を批判する酒飲みのお笑である。そして、上戸にとって、酒がたくさん飲めるので、酒をたくさん飲むと体に悪い「毒」になるが、上戸はちっとも「毒」だと知らないのである。逆に、下戸は全然酒が飲めないので、酒を少し飲むと体により効果があるという「薬」効果を知らないのである。さらに、「産」の苦しみと酒を飲みすぎた後の苦しみを喩え、あとになると忘れてしまい、懲りた者がいないと示唆している。また、酒と女は「敵」に喩え、錠をおろすべきだという。

一方、中国語の諺では、酒の良さを「冬の火」、「別腸」に喩え、酒を飲む人の腸は「海」のように広いという。酒の悪さを「刃物」、「女色の媒介」、人を眠らせる「眠りの魔」に喩えている。酒は体を温める効果あることから、冬の火に喩えている。酒を飲む人は体に食べ物を入れる腸のほかに、酒を入れる腸があると言われている。また、「別腸」と意味が同じで、酒を飲む人の腸は海のように広くて深いことを言っている。ところで、酒の悪さに対し、「刃物」のように毒があり、「女色の媒介」になり、酒は体をだるくし、人を眠らせることがよくある、などの論述もある。酒を飲んだら、人間は自分をコントロールできないことを以上のような比喩表現で表わしている。武田(1992:144)「ことわざのおもしろさは、現実においてはほとんど無縁といってよいふたつの対象を、ただ一つのしかも

あまり本質的でない性質を共有していることを根拠として、強引にむすびつける、その唐突さにある」と述べているように、様々な比喩によって、諺の表現がより豊かになることが見られる。比喩のほかに、諺には誇張や擬人の修辞法も多く用いられている。諺は長くその生命を保つために、時には比較の対象物に奇抜な事物を用いたり、印象深い言葉を用いたりして、人の注意を引き、心耳を刺激することによって、聞く者の頭に強く印象付けようとする手法が見られる。

(4) 茶を表わす比喩

(日)「濃い茶目の毒気の薬」

(中)「蚕是白老虎，茶是黑老虎」(蚕は白い虎であり、茶は黒い虎である)

「隔夜茶，毒过蛇」(一夜越しの茶は蛇より毒がある)

「好茶是个宝，坏茶一堆草」(よい茶は宝、悪い茶は一塊の草)

「冷茶过酒断肠丸」(冷茶餓酒腸を断じる薬)

「从来佳茶如佳人」(従来佳茶は佳人の如し)

「濃い茶」は日本語の諺では、「目の毒」、「気の薬」に喩えている。それは、濃い茶は目に悪いが、しかし、濃い茶を飲むことによって、気持ちをすっきりさせることができる。一方、中国語の諺では、茶の成長速度の速さを「虎」のようであると示している。それは、虎の勢いは茶の生長速度と同じぐらい速いことによるのである。また、品質のよい茶は宝のようであるが、品質の悪い茶は草のようである。さらに、冷茶は体に悪いことから、腸を断じる薬のようである。よい茶は佳人のようで、佳人の上品さはよい茶の上品さと同じことから、そう言われるのである。

(3) 類諺

類諺といわれるものの中に、部分比喩が使われ、主題が字義どおりというのが原則である。「朝酒」、「朝茶」という同一主題について、形式の異なる比喩を叙述にもちながら、全てが同一の理論を語っている。例えば、

A

「朝酒は門田を売ってでも飲め」

「朝酒は女房を質に置いても飲め」

「五割の金を借りても朝酒は飲め」

「朝酒は三杯御神酒のお下がり」

B

「朝茶に梅干を食らえば一日の災難を免れる」

「朝茶に別れるな」

「朝茶は七里帰っても飲め」

「朝茶はその日の祈祷」

「朝茶を飲むとその日の難を逃れる」

以上のAグループの諺は、全て朝酒に関する叙述であり、Bグループは全て朝茶に関する諺である。用いられた表現が異なっているが、諺に語られている道理は全く同様である。Aは、朝酒はいいものであるから、必ず飲まなくてはならないと述べている。Bは、朝茶はいいものであるから、どんなことがあっても、飲まなくてはならないのであると述べている。逆に、朝酒に関する批判の類諺も見られる。

「朝酒は後を引く」

「朝酒はじれのもと」

「朝酒はその日のどら」

「朝酒と朝寝は貧乏の近道」

6. 用語の選択

諺は簡潔な言葉で的確かつリアルにさまざまな事柄を表現するという性格上、当然用語の選択には十分な配慮が必要とされる。ここでは、「酒」と「茶」に関する中国語の諺を例にし、諺はどのような口語や同義語、反義語、数量詞を活用しているか等、いくつかのポイントをあげて述べてみよう。

(1) 口語の多用

諺に用いられる言葉は民衆が普段でもよく使われる口語である。口語を多用することによって、もっと民衆に親しまれ易くなるのである。例えば、

(中)「茶馆剃头铺，说话看前后」(茶屋理髪店、話す時、前後を見ろ)

「茶缸虽小排桌上、尿壶虽大放床下」

(茶を飲むコップは小さくても、テーブルの上に置くものであり、便器は大きくても、ベッドの下に置くものである)

「剃头铺」、「茶缸」、「尿壶」はふだんの生活の中で常用される口語である。このような言葉を使うことにより、諺に語られる奥深い真理がよりはっきりとした現実性と日常性を帯びようになり、より自然で親しみやすく、また生活実感を伴って受け入れられるのである。

(日)「酒屋の歳暮でかすばかり」

「ばかり」は「ばかり」の口語である。

(2) 同義語と反義語

諺における同義語と反義語を使うことによって、諺の意味をいっそうはっきりさせることができるだけでなく、また同じ言葉を繰り返すことも避けることができる。諺の文章にバラエティーを持たせることができるのである。例えば、

(中)「吃酒的望醉，放债的图利」(酒を飲む人は酔いを望み、金貸しする人は利益を図る)

「望」と「图」は字が違う形式で、同じ意味である。共に「望む」という意味である。

「酒坏君子色坏人，烟伤五脏气伤心」(酒は君子を悪くし、色は人間を悪くする。煙草は五臓を損ね、怒りは心を損ねる。)

「坏」と「伤」は同じく、「損ねる」、「悪くする」という意味になる。

「酒满敬人，茶满伤人」(酒満杯人を敬い、茶満杯人を損ねる)

「敬」は「敬意を表わす」という意味になるが、「伤」は「損ねる」という意味になる。

(日)「陥り易きは酒の海、迷い易きは色の道」

「陥り易き」と「迷い易き」、「海」と「道」は諺の中で同義語として働いている。

「鏡は容貌を見せ、酒は心を現す」

「見せる」と「現す」も諺の中で異なる形式で、同じ意味を表している。

(3) 数量詞

諺の数量詞は修辭的技法として使われる場合、実際の数を表わさないことが多い。

(中)「富家一席酒，貧汉一年粮」（金持ちの一席のご馳走は貧乏な家にある一年間の米に当たる）

「三杯美酒唇边过，一树桃花脸上开」（三杯の美酒が唇に触ると、桃の花が顔に咲く）

「酒店门前三尺布，人来人往图主顾」（酒の店で掲げている三尺の布、人が行ったりきたりして、常連客を狙う）

「锦堂客至三杯酒，茅舍人来一盏茶」（豪邸からの客は三杯の酒を、あばら家からの人は茶一杯で招待する）

「喝了碧落春，精神增三分」（碧螺春を飲むと、元気三分増す）

「酒盖三分羞」（酒は三分の恥ずかしさを隠す）

「浓茶猛烟，少活十年」（濃い茶大量の煙草、十年命を減らす）

「茶七飯八酒加倍」（茶七飯八酒増倍）

一方、日本語の諺は、次のようなものがある。

(日)「飢えて死ぬは一人、飲んで死ぬは千人」

「一升入瓢は海へ行っても一升」

「酒三杯は身の葉」

「一献酒は飲まぬもの」

「客人一杯、手八杯」

「朝酒は三杯御神酒のお下がり」

「酒の肴は三風見立て」

「こうぐり膾で酒三升」

「一升徳利こけても三分」

「毒見三杯亭主の役得」

「駆けつけ三杯」

「酒は三献に限る」

「朝茶は七里帰っても飲め」

「お客三杯亭主八杯」

以上挙げた諺から見る共通点として、両言語の諺ともに、数字の「一」と「三」が現れることが多い。「一」と「三」が両国の国民に好まれる理由には、次のようなことが考えられる。汪（2002：33-34）には中国語の数字「一」に関し、次のような論述がある。「一は中国の伝統的な宗教である道教の教義を示す重要な概念である。天地万物の発生と形成

を指す。即ち正常に運行する普遍的な現象の本質であり、その意味は「道」に等しい。」……「一は道教教義の中の重要な哲学的意味を内包し、広範囲にわたって現代生活の中に応用され、人々は『一』を吉祥の教えとしている」、また、「三」に関し、「三も道教の教義の中にいくつかの意味がある。具体的には①道・徳・人を指す。②形体・神・気を表わす。③神・気・精を表わす。④天・地・人を表わす。とりわけ天は一となり、地は二となり、人は三となる道教思想が我々に与える影響にはとても深いものがある」と述べている。

一方、日本語の諺に見られる数字について、坂東（1971：11）は次のように指摘している。「わが国の諺では、『三』、『七』、『八』が特に多い。これらの数字は、わが国では特別な意義を持つ数字とされ、『三』は時間的・空間的な最小限のまとまりを表わし、物事の決着或いは段落を意味し、『七』は七難・七福神・七仏・七夜・七菩提等奇数を重要視する仏教的な影響を受けており、『八』と共に『数や種類の多いこと』を表わす日本的な語感が内在している。……また『千』の数字のつく諺のほとんどは日本古来のものではなく、中国から借りものであることは興味がある。」

7. 考察結果と意義

本稿では、「酒」と「茶」に関する諺の例を挙げながら、その形式的な特徴を探求してみた。その中では、単句形式と対句形式の諺において、単句形式の諺では、非主述文と主述文が挙げられる。対句形式の諺では、対偶、対比、同義対応、反義対応、しりとりなどが挙げられる。また、韻律の美しさという点では、中国語にはリズム、押韻があり、日本語には七・五・三、音の調子、語呂合わせが特色である。特に、比喩表現、誇張、擬人という修辞法の多用も諺の表現に大きな役割を果たしている。諺に口語、反義語、数量詞を活用することによって、諺の表現にバラエティーをもたらしていることが窺える。さらに、対称性を持つ表現と破格表現が見られる。両言語の諺における形式特徴を明らかにすることによって、諺の意味への理解を深めることができると言えよう。

また、諺の表現形式を対照比較することによって、諺のバラエティーに富む表現だけではなく、諺に潜んでいる昔の知識、民衆の知恵や処世の術なども学ぶことができる。中国語の諺が形式的に押韻・平仄・簡練・対句などの要素を備えている以上、中国語学習に用いられたら、大いに役に立てることであろう。一方、日本語の諺が形式的にも韻律、簡潔、対句などの要素を備えているため、中国語と日本語の入門段階での発音練習にも適切である。また、明瞭な音韻の特徴を備えているだけに、中国語の発音のエッセンスに満ちている。さらに中級に進めば、諺の文言的要素は書面語や古典語への橋渡しにもなるのだろう。また、両言語の諺を対照比較研究することによって、異なる文化を背景にした諺の表現も身につけることができる。このような諺の表現を外国語教育に生かすことはまさに語学を学習することに大いに役に立つであろう。

参考文献

汪玉林（2002）「中国語の中の数字文化」『明海日本語』明海大学 第7号 pp.33-35

温 端政 主编（2004）『中国谚语大全』上海辞书出版社

坂東浩司（1971）「諺表現の研究—日英両諺を比較・対照させて—」『東海大学紀要』東海大学文学部 第16輯 pp.3-18

尚学図書編（1981）『故事・俗信諺大辞典』小学館

関本 至（1983）「現代ギリシア方言に見る諺の修辞法」『レトリックと文体』古田敬一（編）丸善株式会社pp.1-30

武田勝昭（1992）『ことわざのレトリック』海鳴社

古田敬一編（1983）『レトリックと文体—東西の修辞法をたずねて—』丸善株式会社